



経済産業省

Ministry of Economy, Trade and Industry

令和4年度中小企業実態調査事業

仕事と介護の両立に係る機運醸成に向けた関連調査事業報告書

「OPEN CARE PROJECT」

The Breakthrough Company GO 2023.3.24



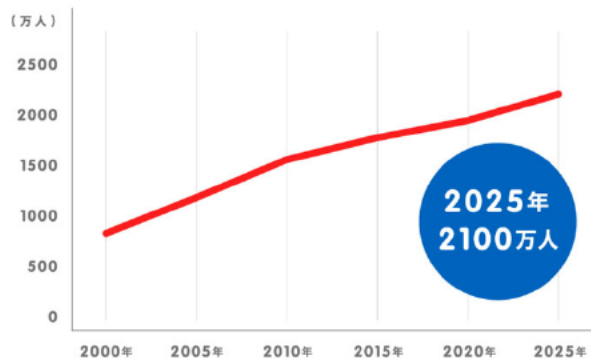
1. 本事業の目的・背景
2. 仕事と介護の両立に係るメディア報道調査・分析
3. 介護に係る社会認知を変容させるための未来対話実施・運営
4. 仕事と介護の両立を含む介護の将来的なあり方に関する
成果物作成・情報発信

1. 本事業の目的・背景

-日本は世界に類を見ない超高齢社会を迎える-

2025年、 6人に1人が75歳以上に。

75歳は介護される率がぐんと高くなる年代。
右肩上がりのこのグラフを見ると、
どんどん介護する人・される人が
増えていくことがわかります。



厚生労働省 第92回社会保障審議会介護保険部会
(2022年3月24日)資料1より作成

高齢化に伴い、 ビジネスケアラーが増加。

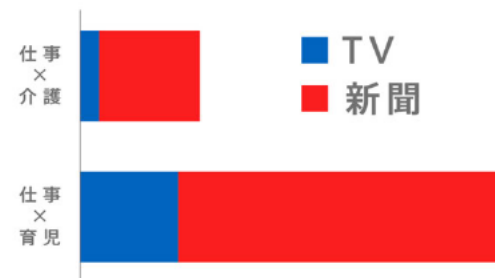
高齢社会の進行に伴い、
仕事をしながら家族などの介護をする
(ビジネスケアラー) の数が増えています。
2030年には、ビジネスケアラーは318万人になる見込みです。

2030年
318万人

経済産業省第13回 産業構造審議会
経済産業政策新機軸部会
(2023年3月14日)資料3より作成

介護の報道量は、 育児に比べ3割以下に。

新聞やテレビの報道数を比べてみたところ、
育児に比べて介護の報道量は、1/3の結果に。
当事者の数に比べ、まだまだ社会的関心が
低いことがわかりました。



経済産業省 令和4年度中小企業実態調査事業
(仕事と介護の両立に係る機運醸成に向けた関連調査事業)より

- 「OPEN CARE PROJECT」は、
介護を「個人の課題」から「みんなの話題」へ転換することを目的としており、
介護当事者や介護業務従事者、メディア、クリエイター、企業等、多様な主体を横断して、
介護に関する話題を議論し、課題解決に向けたアクションを推進するプロジェクトです。
- 具体的には、本プロジェクト趣旨に賛同する団体・個人等が主体となる取組につき、
ロゴマークの提供等を通じて後押しするとともに、
介護当事者やクリエイターといった業種横断での対話・マッチングの場を設けることで
コミュニティ拡充や社会機運の醸成を図ります。

2.仕事と介護の両立に係る メディア報道調査・分析

定量調査

調査概要

検索ワード

「仕事 介護 両立」 「仕事 育児 両立」
「介護休」 「育児休」 「育休」 の5キーワード

TV

過去3年分をリサーチ（エヌケンを使用）

新聞

過去3年分をリサーチ（内外切り抜き通信社を使用/露出一覧のみ）

WEB

過去1年分をリサーチ（WEBクリッピングを使用/露出一覧のみ）

SNS

過去3年分をリサーチ

報道量

WEBニュースを除き、メディア報道量、SNS投稿量ともに、
「育児」の方が「介護」より多い結果に。

	仕事と育児 / 育児休 / 育休	仕事と介護 / 介護休
TV	567	117
新聞	1,893	573
WEB	89,879	110,209
SNS	348,325	183,843

報道内容サマリー①

「仕事と介護」と「仕事と育児」の報道内容の差

- 「育児」に関しては、「仕事と育児」に関する情報のみで報道されている一方で、「介護」については、「育児や介護など」と、育児とワンセットで報道されることが多く、単独で企画化されているものは少なかった。
- TVでは、「介護」に関する企画を積極的に組んでいるメディアはNHKを除き少なく、民放のほとんどは、法改正の動きに関するストレートな内容の紹介に留まることが多く、課題に対しての企業の動きやサービス等、ポジティブな報道がほとんど見受けられなかった（ZERO / スッキリ！はそれぞれ1回実施）。
一方「育児」では、民放においても、エンタメや情報コーナーで、両立に向けた企業の取り組みや、ママタレントの紹介、「育児」を題材とした映画の紹介等、紹介の幅が広くあった。
- WEBメディアにおいては、「育児」向けのメディア（ママ系メディア）や、仕事と育児を両立するメディア（日経DUAL、マイナビウーマンなど）等、専門系のメディアが数多く存在しているが、「介護」についての専門系のメディアは、影響力の高いメディアがまだ少なく、育児と併せて紹介されるケースが多い傾向がみられた。

報道内容サマリー②

「仕事と介護」に関するメディア露出上の課題

「介護」において、企業や自治体のアクションが少ない

「介護」においては、解決に向けたき企業の取り組みやサービスがそもそも少なく、
問題提起だけの報道に留まっていると見受けられる。

企業や自治体のアクションを増えれば、露出量増加につながる可能性が高い。

定性調査

メディアインタビュー①

▼介護に関する企画に対する所感

- ・ 「介護」が社会問題であるが故に、企画会議で題材としてあがることは定期的にある。
しかし複数ある企画案の中で「介護」が選ばれることは少ない。

▼介護に関する企画が選ばれにくい理由

- ・ その理由は主に2点。
 - ①「いま」取り上げる理由が弱いことが多い。
 - メディアは基本的に「その瞬間において扱う理由を求めている（新情報や、●●記念日にまつわる情報など）」
 - そうしたときに「介護」に関する新情報は少なく、いま取り扱う必然性を見つけにくい。
 - ②取材協力者を探すのが難しい。
 - 介護している当事者として、自分の顔を晒したい人が少ない。
 - 従って、取材協力してくれる人を探すのに一苦勞し、企画が進もうとしてもそこで企画が不成立となるケースが多々ある。
 - （先日は、関西から広島までわざわざ該当者の撮影に行った）

▼どうすれば介護に関する企画を選びやすくなるか

- ・ とにかく情報量を増やしてもらうしかない。
まさに育児のように、企業の取り組みが増えてくれば、何か「介護」について扱おうと思ったタイミングで、企画化しやすくなる。

メディアインタビュー②

▼介護に関する企画に対する所感

- 報道量として少ないのはよく分かる。
最近だと「プロテインも支給する、マッチョ×介護の施設」が話題になっていたのは印象深い。
<https://www.oricon.co.jp/special/61723/>

▼介護に関する企画が選ばれにくい理由

- その理由は主に4点。
 - ①企業の取り組みが少ない。
 - ②語れる当事者が少ない。
 - 生理やLGBTQには、発信力を持つ当事者がいる。
 - ③情報の規模感が小さくなりがち。
 - 国単位で取り組んでいるものも一定数あるが、介護領域においては地域単位でのアクションが多い印象。
となると全国紙として扱う必然性が少なく、情報としての優先順位が低くなってしまいがち。
 - ④題材として「キャッチー」でない。重い企画になりがち。

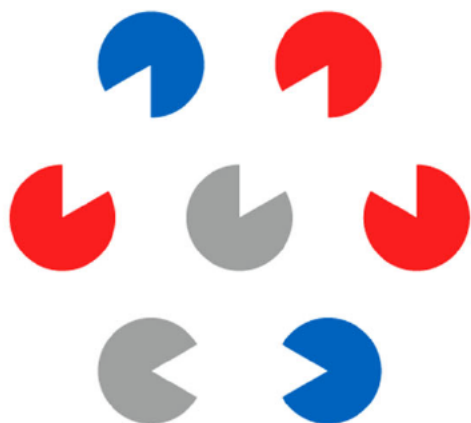
▼「介護」領域の主な担当の割り振り

- 厚労省付き： 厚労省からのプレスリリースや、厚労省内での介護に関する記者会見、また国会での議論を主に扱う。
- 社会部： 介護領域の事件や、企業の取り組みを主に扱う。
- 地方部： ローカルニュースとしての介護情報を主に扱う。

3.介護に係る社会認知を 変容させるための 未来対話実施・運営

「OPEN CARE PROJECT」では、立ち上げに至るまでに、介護当事者、介護業務従事者に加え、クリエイターを交えた討論会「OPEN CARE TALKS」を3度開催。
多様な背景を持つ参加者同士で議論を行い、「介護」が抱える課題の共有から、解決に向けたアイデア開発まで実施してきました。





多様な背景を持つ
参加者同士で
議論を行う

介護当事者、介護業務従事者、
企画者の3組が議論する場を設計。

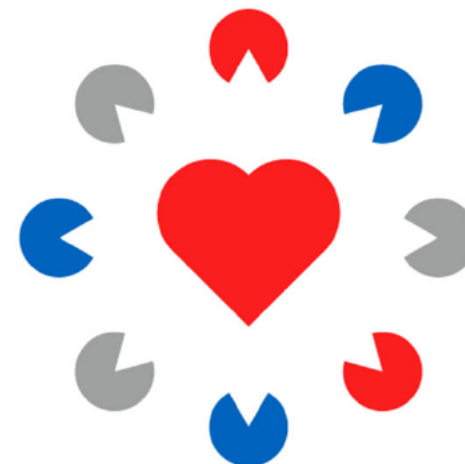
異なる 意見を持ち寄り、議論を深めました。
議論する環境をつくりました。



課題共有だけでなく、
アイデア開発まで行う

介護に関する実態を把握すると共に、
課題を解決するためのアイデアをみんなで議論。

トークセッションで出たアイデアは、
実現に向けて、動くことも視野に入れます。



TALKSで出た
アイデアは、
みんなで形に

議論の中で出たアイデアは、
みんなのもの。そのまま取り組んでみるのも、

議論内容をもとに
アイデアを考えるのも自由です。

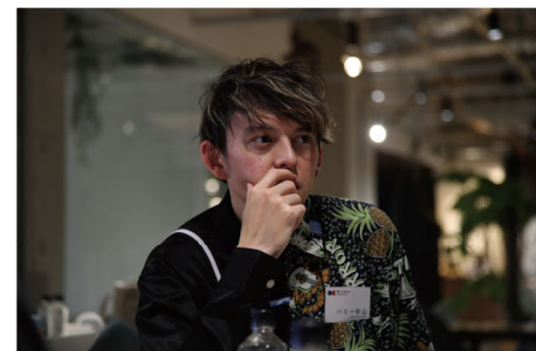
概要

家族だからこそ、介護の話はなかなかしづらい。子どもに「将来、介護はこうしてほしい」と伝えるのも、親に「老後どうするつもり?」と聞くのもなかなか気が重いもの。しかし、話さないままにその日がやってきたら…。家庭の中で介護の話をするにはどうすればいいのか? 家族間で介護をオープンに話すためのディスカッションを行いました。



アイデア開発

「介護と世間の距離を、もっと身近に感じられるようにしよう」
「親の70歳の誕生日を、介護の話を持ち出すひとつの目安として意識する文化をつくろう」
という2つの観点から議論は盛り上がりました。



1つ目の観点からまず生まれたのは、介護施設を皆が利用できる場所にするというアイデア。昨今増えてきたカフェ併設型コインランドリーのように、例えば駄菓子屋併設型介護施設にすることで、介護が身近な存在になるのではないかと議論が行われました。

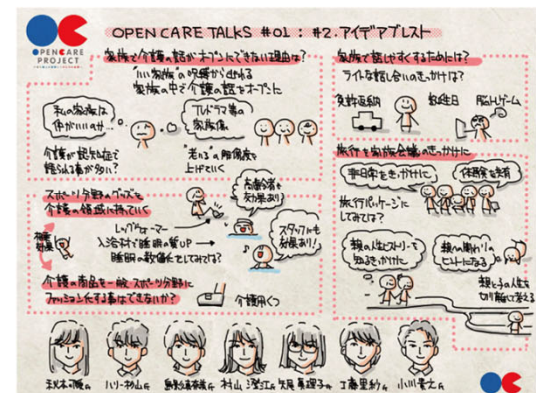
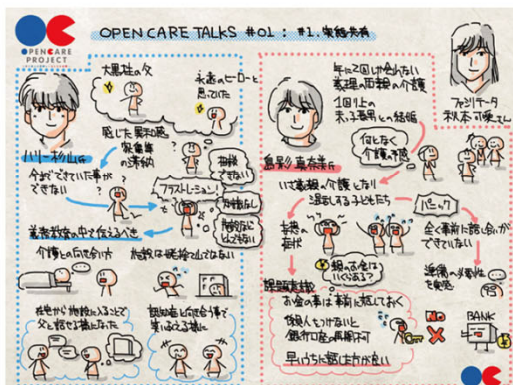
また、介護現場で使用されているものを「介護現場御用達グッズ」としてブランディングしていくのもいいのでは? という議論も起きました。

2つ目の観点では、70歳の親を持つこどもに向けた「親孝行ツアー」を旅行会社とつくっていく企画や、親の人生史をまとめることを通して、老後の話を促す「人生史まとめサービス」の開発など、大小さまざまなアイデアが生まれました。

実態共有

ハリーさんは父親との介護生活についてお話をくださいました。大黒柱の父の「できないこと」がどんどん増えていくことに、当初はなかなか向き合えなかったとのこと。また、介護施設に預けることに対して罪悪感があり、頼り難かったことなどをシェアしてくださいました。

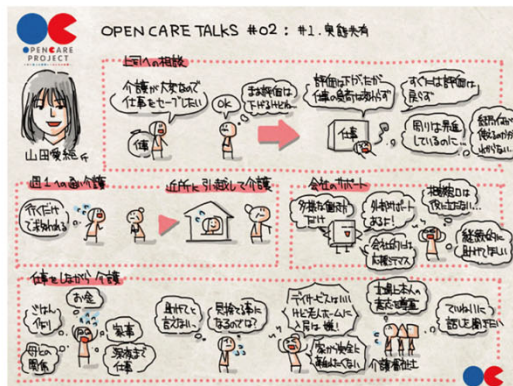
島影さんはパートナーのご家族の介護を経験。パートナーの家族という立場から、「将来の介護が気になっても、介護の話を持ち出しにくかった」とリアルな声を共有してくださいました。また、ご自身の親とは、祖父母の話を通して介護の話をしたという経験から、「親の親の介護の話は、介護を話すきっかけになるのでは」という示唆をくださいました。



概要

働きながら介護する。「働くこと」も「介護すること」もどちらも大変なゆえに、両立するのは至難の業。それなのに、社会では、「子育てとの両立」はよく聞けれど、「介護との両立」はなかなか話題にあがっていませんでした。

介護する人が増えていくこれからの社会において、働く人も、そして企業も、この問題に向き合っていく必要があります。企業の中で働く人が介護をオープンに話せるようになるには？介護と仕事を両立するために、ディスカッションを行いました。



実態共有

山田さんは、おばあちゃんの介護をしたという実体験をお話くださいました。介護経験を通して、「多様な働き方を応援する」という社会のスタンスと、実際の支援制度に乖離を感じたという山田さん。まだまだ介護をしながら働くことは、難しい実態があることを教えてくださいました。

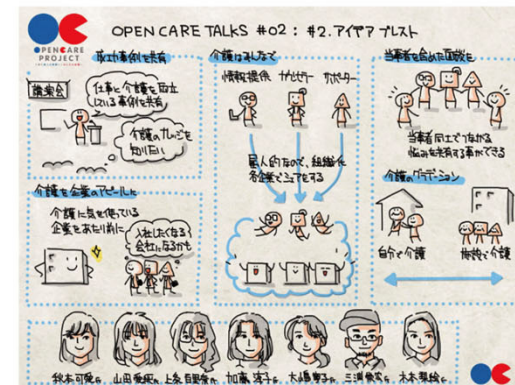
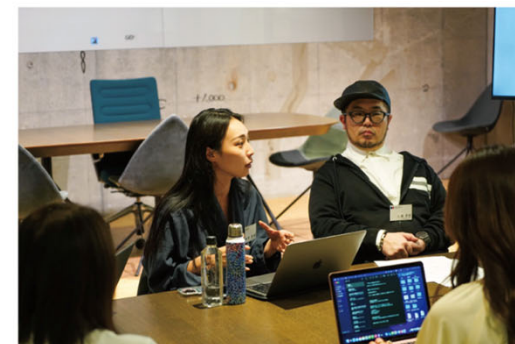
アイデア開発

「介護支援の成功事例を、企業の中で広げていく」という観点のもと、議論が繰り広げられました。

例えば個人情報の取り扱いを適切に行っている企業にはPマークがつくように、「介護と仕事の両立」に配慮している企業にもマークをつけてブランディングしていくというアイデアが出ました。

また、介護支援がうまくいっている企業の人事やカウンセラーたちをチーム化（プロ組織化）し、他企業に派遣するといったアイデアもできました。

また、「介護者と上司」の2者間の面談ではなく、「介護者、上司、別の介護者」という3者面談を設定していくというアイデアもできました。それにより、理想論ではない「働き方支援」を実装するとともに、介護者同士のつながりをつくることも狙うというアイデアです。



概要

要介護状態であったとしても、できることはあります。にも関わらず、ひとたび要介護者として認定されると“お世話される側”という立場が固定してしまう。そんなことが多くの人のもとで起こっています。

できないことではなく、できることに目を向ける社会を目指し、「介護者との関係性をオープンに」をテーマにディスカッションを行いました。



実態共有

前田さんが手がける介護施設では、入居者がディーラーで洗車するという仕事の時間をつくっているそう。当事者も役割を与えられることで自己肯定感が上がり、イキイキと仕事の話をしているそうです。

地域コミュニティの活性化支援をしてきた濱野さんが運営するコミュニティでは、不登校生におばあちゃんがジャンルの作り方を教えたりと、世代に関わらずコミュニケーションが生まれているというエピソードをシェアしてくださいました。

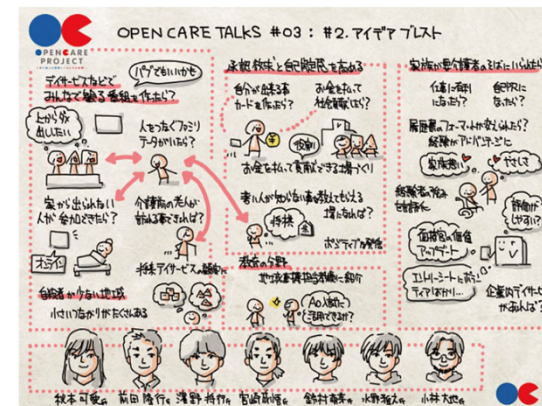
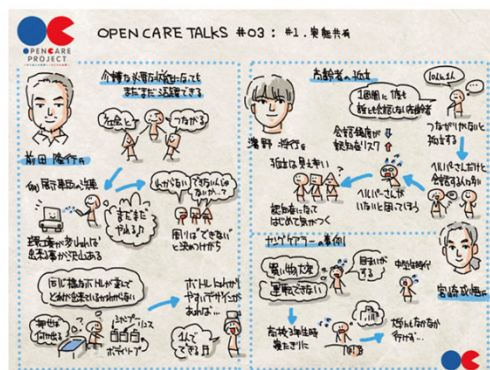
ご自身もヤングケアラーとして介護の経験を持つ宮崎さんからは、要介護者だけでなく、介護する側も包含した社会づくりが必要だという示唆をいただきました。

また大学生と介護現場のマッチングをプロデュースしている鈴村さんからは、介護を「社会問題（ソーシャルイシュー）」として打ち出すことで、若い世代への興味関心を高められるという提言をいただきました。

アイデア開発

ひとりで暮らしている高齢者の方々の会話頻度は「1週間に1度以下」という課題共有を受け、テレビプロデューサーの水野さんから、「地域間で会話を生むためにはどうしたらいいかを念頭に番組づくりをしてもよいのでは？」というアイデアが。具体的には団地全員で参加するクイズ番組などの企画が出ました。

また他にも、70歳以降のライフイベントを想定した人生のボードゲームを開発するというアイデアも誕生しました。プレイする人に介護される側になる状況を解像度高く想像してもらうことで、介護される側の理解を促すという案です。またヤングケアラーが採用時にアピールしにくい現状があるという課題を解決するためのアイデアとして、ヤングケアラー向けのエントリーシートをデザインするという案も出しました。



3. 仕事と介護の両立を含む 介護の将来的なあり方に 関する成果物作成・情報発信

 OPEN CARE PROJECT お披露目イベント写真
介護も「個人の課題」から「みんなの話題」へ。







プロジェクト発達の予測

2025年、第1次産業・アグリ・フィード・アグロ・バイオ・ヘルス・エナジーに注力
 「国際的な競争力強化と国内産業振興のため、政府は戦略的な産業分野に注力する見込みです。」

その中でも重要視される一領域として、バイオ産業が挙げられます。

「バイオ産業は、国産資源の活用と技術革新が鍵と見られています。」

つまり、国産資源を活用したバイオ産業が注目の的と見られます。

**2025年、
6人に1人が
75歳以上に。**

「高齢化が進むにつれて、医療や介護の需要が増える見込みです。」

高齢者の生活の質を向上させるため、バイオ産業の技術が活用される見込みです。

75歳以上の人口増加の予測 (単位: 万人)

年	75歳以上の人口 (万人)
2020	10,000,000
2021	10,500,000
2022	11,000,000
2023	11,500,000
2024	12,000,000
2025	13,050,000

**超高齢化に伴い、
ビジネス
セラーが増加。**

高齢者の消費需要が増える中、
 中でも最も大きな消費分野の一つとして、バイオ産業が注目されています。

2025年には、バイオ産業セラーは
 318万人と見込まれています。

2030年

318万人

バイオ産業セラーの増加の予測 (単位: 万人)

アイデア開発

「小説と漫画の両方を書く、もしくは漫画と小説のどちらかより先に小説を書く」

「漫画が小説を書くより、小説が漫画を書くほうが圧倒的に楽である」という意見があるが、それは必ずしも正しくない。

小説を書くにはまずプロットを練る必要がある。プロットを練るには、登場人物の行動パターンや心理状態を想像し、それを紙に書き出す必要がある。これは、漫画を書くよりも難しい作業である。

一方、漫画を書くには、まずキャラクターのデザインや設定を考える必要がある。これは、小説を書くよりも簡単である。ただし、漫画を書くには、ストーリーを練る必要がある。これは、小説を書くよりも難しい作業である。

結論として、小説を書くよりも漫画を書くほうが楽であるという意見は、必ずしも正しくない。どちらの作業も、それぞれに難しさがある。どちらの作業も、しっかりと取り組む必要がある。

[illegible][illegible][illegible]